

1959 年-1980 年における 「バンド・ジャーナル」誌の特集記事に 関する内容分析

A Content Analysis of Feature Articles in “Band Journal” magazine,
1959-1980

大倉 恭輔
OHKURA, Kyosuke

wind music, “Band Journal” , 1959-1980, feature articles, content analysis

Summary

「バンド・ジャーナル」は 60 年近い歴史を持つ吹奏楽の専門誌であるが、1978 年
前後から雑誌の方向性が変化していることが明らかとなった。すなわち、吹奏楽およ
び吹奏学界への提言をはじめとした広義の啓蒙的・指導的なものから、全日本吹奏楽
コンクールに関連した情報提供という方向性への変化である。また、この変化の背景
には吹奏楽愛好層の拡大とコンクール参加校数の増加という量的な要因が大きいこと
が示唆された。

はじめに

吹奏楽は、スポーツの試合における応援なども含めると、日常生活の中でなじみの
ある演奏形態のひとつである。同時に、それは学校教育の場において、人気のある
部活動のひとつとして数えられる。全日本吹奏楽連盟によれば、2014/平成 26 年度
の加盟団体数は 14265 団体であり、社会人や大学サークルを除いた内訳は「小学校：
1173 校・中学校：7192 校・高校：3810 校」である。（全日本吹奏楽連盟 2014）同
年度の文部科学省の統計によれば、「中学校数：10628 校・高校：4981 校・中等教育校：

50 校」である。(文部科学省 2014) このことから、ことに中学校・高校の部活動における吹奏楽の占める位置が理解できる。

そうした規模を有する吹奏楽界に対して情報提供をおこなうメディアのひとつが「バンド・ジャーナル」誌である。1959/ 昭和 34 年創刊の同誌は、2018/ 平成 30 年現在、唯一の月刊専門誌として発行継続中である。このことから、日本の吹奏楽界のあり方と変化を理解しようとする場合、同誌の編集方針および記事内容からの分析が有効であると考えられる。

大倉は、これまでに同誌の付録楽譜の選曲傾向と変化および特集記事の傾向と変化について分析をおこなってきた。(大倉 2016, 2017) 後者の特集記事に関する研究では、1980 年からの 20 年間、「バンド・ピープル」という競合誌が存在した時代に着目した。競合誌の誕生はマーケットの拡大を背景とし、吹奏楽愛好者の質的变化と多様性を反映するものと推測したためである。

しかしながら、いくつかの相違点をみせながらも、ふたつの雑誌はともに「全日本吹奏楽コンクール」に関連する情報を提供するメディアという性質に集約されていることが明らかとなった。そうして、その傾向は当該研究の対象時期以前に確立していることが予想された。(大倉 2017)

そこで、本稿では、「バンド・ジャーナル」誌の創刊から、競合誌である「バンド・ピープル」創刊前月までの期間を対象として、あらためて特集記事の分布と特徴について分析をおこなう。これによって、日本の吹奏学界におけるいわゆる「コンクール至上主義」の成立の過程を確認するものである。

調査の目的と方法

01 調査の目的

吹奏楽愛好者における「全日本吹奏楽コンクール」重視の傾向が生じてきた時期を、「バンド・ジャーナル」誌の特集記事の内容と変化から明らかにする。同時に、データの分析をとおしたさらなる課題探索の作業をおこなう。

02 調査の対象と方法

a 対象

「バンド・ジャーナル」誌の 1959/ 昭和 34 年 10 月号（創刊号）から 1980/ 昭和 55 年 3 月号までの 246 冊・256 記事。

なお、対象期間（号数）は、競合誌である「バンド・ピープル」誌が創刊さ

れる前月までとする。これは、大倉の研究から、同誌創刊時には「バンド・ジャーナル」誌が「コンクール重視」の誌面構成になっていることにもとづく。(大倉 ibid.)

b 方法と手順

- 1) 内容分析。
- 2) 対象期間の特集記事を各号ごとに記録し、内容を検討の上、グルーピングおよび比較。
- 3) 必要に応じて、2017 年の大倉論文で対象とした期間（1980 年 4 月号 -1999 年 3 月号）の結果と照合する。
なお、グルーピングに際しては、当該論文で使用した基準に加え、「12 特集なし」の項目を設置した。

1 コンクール報告	5 楽器関連	9 演奏会演出
2 課題曲関連	6 楽曲・楽譜理解	10 作曲家・演奏家
3 コンクール対策	7 奏法・練習法	11 その他
4 他コンクール報告	8 運営・指導法	12 特集なし

- 4) 号によっては、「特集」と銘打たれていないケースがある。この場合、記事内容やページ数などから、特集と判断されるものを集計対象とし、そうでないものは「特集なし」に分類した。
また、「第 1 特集」「第 2 特集」のように、複数の特集が組まれている場合は、それぞれひとつの特集記事として集計した。したがって、分析対象の号数と特集数は一致しない。

結果と考察 01 創刊号から 1980/ 昭和 55 年 3 月号までの特集記事の分布

本項では、1959-1980 年 3 月号までの時期と 1980-1999 年 3 月号までの時期を比較しながら分析をおこなう。

tab.1 からわかるとおり、それぞれ約 20 年間の発行期間において、特集記事数に大きな開きはない。しかし、「1: コンクール報告・2: 課題曲関連・3: コンクール対策」の 3 項目において、大きな違いが生じていることがわかる。1980 年代初頭まではそれらの合計は、すべての特集記事のうちの 15% 程度であるのに対し、1980-1990 年代では 45% に達している。

これは、吹奏楽に関係する読者のニーズが「吹奏楽コンクール」に関する話題・情報の享受にあることの証左である。そうして、それらのニーズに応えることは商業誌として当然のことといえよう。

ふたつの期間の間に差の大きいものとして、他に、「5:楽器関連」と「8:運営・指導」の特集がある。

創刊からの20年間ににおける「楽器関連」の記事は、特集全体の6%強であった。その内容も、個別の楽器の魅力を伝えるものが3件ある以外は、「輸入楽器診断室(1963年2月号)・私のおすすめる楽器(1967年7-8月号)」といったものである。これが、1980年代以降は特集全体の18%以上を占め、個々の楽器に関する記事が繰り返し掲載されるようになる。これは吹奏楽人口の増加とともに、部活動での指導とは別のチャネルで自身のパート(担当楽器)に関する知識を得ようとする層の増加に対応するものと思われる。

逆に、特集化されることが減少しかつ内容も変化したのが「8:運営・指導」である。1970年代までは全体の14%を占めており、「バンドの予算と編成(1960年3月)・楽器と編成(1966年5月)・スクール・バンドの運営上の問題点(1971年6月)・これからのレパートリー(1975年3月)」などの記事を見ることができる。これらは、吹奏楽部員というよりは監督・コーチあるいは部長に向けた企画といっていよい。こうした問題は今日でもあるとはいえ、現代ほど情報がたやすく手に入らない時代においては、有用性の高い記事であったことがうかがわれる。

1980年代以降では特集数も少なくなり、全体の4%程度となる。内容も「バンド[吹奏楽]をもっと楽しもう! ~部員が主役、バンドづくりのエッセンス~(1998年3月)」のような、部員の視点からの記事作りになっている。これらは、1980年代以降

tab.1 Band Journal 特集記事分類比較

n=256, 245

	1:コンクール	2:課題曲関連	3:大会対策	4:他大会報告	5:楽器関連	6:楽曲・楽譜
1959-1980	28 (10.94%)	13 (5.08%)	0 (0.00%)	3 (1.17%)	17 (6.64%)	8 (3.13%)
1980-1999	57 (23.27%)	44 (17.96%)	10 (4.08%)	17 (6.94%)	46 (18.78%)	5 (2.04%)
	7:奏法・練習	8:運営・指導	9:演奏会演出	10:作者・演者	11:その他	12:特集なし
1959-1980	21 (8.20%)	36 (14.06%)	1 (0.39%)	16 (6.25%)	65 (25.39%)	48 (18.75%)
1980-1999	22 (8.98%)	10 (4.08%)	3 (1.23%)	17 (6.94%)	14 (5.71%)	—

* 対象冊数は246冊(1959年10月号-1980年3月号)・228冊(1980年4月号-1999年3月号)。

** 集計対象が1980年3月までなのは、競合誌との比較をおこなった大倉論文(2017)との関係による。

の部活動運営において、そのための情報やノウハウが蓄積されるようになったことから、ニーズの低下を招いたものと解される。

しかしながら、本表でもっとも注目すべきことは、個別の特集区分よりも、「11：その他」と「12：特集なし」にあるといつてよい。

「その他」の内容は、種々の分類不能な特集の集積とは異なる。そこには、広義の吹奏学界への提言である内容が多くみられる点に特徴がある。今回の特集記事の分類は、1980年代からの競合誌（バンド・ピープル誌）との比較分析のために策定されたものである。このとき、両誌の誌面を比較しながら分類項目を作成したが、当該時期の「バンド・ジャーナル」誌の「その他」に分類された項目は、「読者からの投稿大特集Ⅱ 1985（1985年10月）・バンド大好きっ子のためのオモシロ音楽用語集（1988年7月）・管楽器奏者必携アクセサリーはコレだ！（1995年9月）」などであり、1970年代までの内容とは大きく異なることがわかる。

tab.2 特集分類における「11：その他」の代表例（1959-1980）

年度	号	特集名
1960	10	新しい器楽教育と吹奏楽
1968	10	社会人とバンド
1970	3	吹奏楽曲のカットについて -その問題点と方法
1971	10	法人化をめざす全日本吹奏楽連盟
1975	5	女性指導者からの発言
1977	3	これからの吹奏楽レパートリー
1978	4	2 吹奏楽の環境アメリカと日本

こうした読者を指導するような特徴は、特集以外の部分に着目することでより明確となる。そうして、その象徴的なものとして「巻頭言」の存在を挙げることができる。同誌では、創刊から1977/昭和52年3月号まで、巻頭言の欄を設置していた。時期によりタイトルがつく場合とつかない場合があり、いわゆる提言のようなものから雑感にいたるまで内容もさまざまである。

巻頭言は古いタイプの論壇誌などにみられるものである。だが、視点を変えれば、同誌が日本の吹奏学界を指導していこうとする矜持のあらわれとみなすことができよう。1) たとえば、「吹奏楽の持つ危険性（1961年2月）・現在の吹奏楽に欠けるもの（1967年4月）・吹奏楽活動の知・技・心（1973年5月）・学校バンドの進むべき道（1977年3月）」など、いずれも指導者としての視点といえることができる。

なお、今回、分類項目に加えた「12：特集なし」については、実際にはもっと数が多いことを付記しておく。調査の「方法と手順」の項で記したとおり、原則として、特集と銘打たれていない場合でも、内容とページ数などから特集として分類しているケースがあるためである。

その上で、全体の18%を「特集なし」が占めていることについては、明確な理由を見いだすことが困難である。商業誌・非商業誌を問わず、読者のニーズや耳目を集めるためには、なんらかの「特集」を組むことが有用でありかつ一般的な方向性であるとき、特集を組まないことの積極的な理由は考えにくい。

そのため、本件については推測の域を出ないが、当時の編集サイドや関係者において、毎月の特集を企画・構成する余力がなかったことが考えられる。たとえば、当該時期においては、「座談会」が誌面を飾ることが多く、年間の半分以上の号において座談会が巻頭記事となることが目次からわかる。さらに、少なくとも1980年代以降は「特集なし」の状態がなくなることから、この推測には一定の根拠があるといつてよいだろう。

結果と考察 02 特集記事の年別および月別分布

本項では、創刊号から1980/昭和55年3月号までの特集記事につき、年度ごとおよび月ごとの分布から考察をおこなう。

はじめに、年度ごとの動向について確認する。tab.3から、「コンクール関連特集」(大会報告・課題曲関連・対策)が、1978年から増加していることがわかる。そうして、ここから後の「吹奏楽コンクール情報誌」的な性格の基礎が確立されたといつてよい。この背景にはいくつかの要素があるものと推測されるが、まずは、この前後の吹奏学界の動向を把握しておく。

tab.3 Band Journal 特集記事分類 (1959-1980) : 年別

特集分類	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969
1 コンクール報告		1	1	2		1	1	1		1	1
2 課題曲関連		1				1			1		1
3 コンクール対策											
4 その他コンクール報告											
5 楽器関連			1		5				1	1	2
6 楽曲・楽譜理解				1				1	1		1
7 奏法・練習法		3		3				5		2	
8 運営・指導法	1	2	3	1	1			2	4	3	1
9 演奏会演出											
10 作曲家・演奏家		1	1	3							
11 その他	2	3	3		1				1	5	5
12 特集なし		1	4	4	5	10	11	3	4		1
年別 特集数 小計	3	12	13	14	12	12	12	12	12	12	12

特集分類	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	合計
1 コンクール報告	1	1	3	2	2	1	1	1	3	3	1	28
2 課題曲関連							1	2	2	3	1	13
3 コンクール対策												0
4 その他コンクール報告							1		1	1		3
5 楽器関連	1			2			1	1	2			17
6 楽曲・楽譜理解		1		3								8
7 奏法・練習法		2	1	2	1	2						21
8 運営・指導法	3	3	2		4	2	1	3				36
9 演奏会演出							1					1
10 作曲家・演奏家		1		1	1	2	1	2		2	1	16
11 その他	7	4	6	3	5	5	6	4	3	2		65
12 特集なし									3	2		48
年別 特集数 小計	12	12	12	13	13	12	13	13	14	13	3	256

* 対象冊数は246冊。1959年10月号から1980年3月号まで。

** 集計対象が1980年3月までなのは、大倉論文(2017)との関係による。

*** 1980年4月から1999年3月までの特集数の合計は245件である。

tab.4 からわかるとおり、1970 年代後半から、吹奏楽関連のコンクールやコンテストが相次いで誕生している。同じ管・打楽器による演奏でも、座奏による吹奏楽の他にさまざまな形態がある。演奏だけでなく視覚的にも楽しめるマーチングや、少人数でも楽しめるアンサンブルなどが一例である。こうした吹奏楽の派生形態においてもコンクールやコンテストが開催されるということは、それだけ管・打楽器に親しんでいる層が拡大していることの証左でもある。

そうして、今日の「全日本吹奏楽コンクール」への強い情熱が形成されていった背景には、これらの層の拡大が少なからず影響しているものと解される。さらに、1977/ 昭和 52 年の「普門館の定着・高校バンドの全盛」は見落とせない要素であるといってよい。地区予選を勝ち抜き全国大会へ駒を進めるという構図が、甲子園をめざす高校野球に重ね合わされた可能性は否めない。事実、後年になって普門館は「吹奏楽の甲子園」と称されることになる。ただし、いずれにしても可能性の域を出ないこともあり、この点についてはさらなる検討が求められる。

tab.4 1980 年前後の吹奏学界の動向

年度	事項
1973/ 昭和 48 年	全日本吹奏楽連盟の社団法人化 第 1 回マーチング・バンド全国大会開催
1974/ 昭和 49 年	全日本吹奏楽コンクール課題曲の部門別を廃し自由選択制を導入 全日本吹奏楽コンクール会場が普門館に定着
1977/ 昭和 52 年	コンクールの話題が中学から高校へ移り、高校バンド全盛時代を迎える
1978/ 昭和 53 年	全日本吹連創立 40 周年 第 1 回アンサンブル・コンテスト開催
1980/ 昭和 55 年	「バンド・ピープル」誌創刊
1981/ 昭和 56 年	第 1 回バレード・コンテスト開催
1982/ 昭和 57 年	第 1 回全日本小学校バンド・フェスティバル開催

* 秋山（2013）をもとに大倉が抜粋・作表。

前項で指摘したとおり、創刊からの 20 年間では、「その他」および「特集なし」の比率が多くなっている。

tab.3 をみると、「その他」に分類される特集は当初からあったものの、1970 年代に増加していることがわかる。なお、1980 年 4 月から 1999 年 3 月までの期間での特

集数は14件である。そのことから、「その他」に分類される特集は1970年代に限られたものといえるが、tab.2での例示からわかるとおり、吹奏楽をさまざまな視点から考え発展させていこうとしていた時代であったといえよう。

しかし、1970年代後半からはじまるコンクール関連情報の提供の強化によって、そうした部分は採りあげられにくくなったものと解される。

「その他」とは逆に、「特集なし」の状態は1960年代に集中している。これは、前項で指摘したように、創刊当時の編集体制に起因するものと考えられる。ただし、1960年から増加していき、1964-1965年では年間をとおしてほとんど特集のない状態になるものの、1966年からは減り始めている。このような推移は、仮に編集体制に起因するもののだとしても一時的なものと解すべきであろうが、今回の調査からはその理由に関する手がかりは得られなかった。

次に、月別の分布について確認する。また、本表では、1959年から1980年3月までと1980年4月から1999年3月までの、ふたつの期間を比較させる。

すでに指摘してきたように、「コンクール関連」の特集回数は、ふたつの時期で大きく異なっており、1980年代以降の方が多くなっている。そうして、「コンクール報告」の特集は11月から始まり翌年の1月まで続く。それ以前の時代でも、全国大会の結果報告は特集されている。だが、3ヶ月にわたり報告がなされるようになったのは、全国大会だけでなく各支部での大会結果も特集にしているためである。すなわち、コンクールの結果報告は地方の大会レベルの結果（＝情報）にもニーズがあるということである。

続く2月には「自由曲集計一覧」が特集される。コンクールでは、課題曲と自由曲が課せられるが、他校がどのような曲を選択し入賞を果たしているのかは、関係者にとって大きな関心事であることがうかがわれる。

「課題曲関連」の特集は5月にもあり、その年の大会における課題曲に関する情報が特集化される。たとえば、「作曲者が語る課題曲」のようなものである。コンクールの入賞校・強豪校の演奏を収録したCDやDVDは多く発売されている。しかし、情報が少ない曲の場合、そうした特集によってよりよい演奏のヒントを得ようとするものと解される。

いずれにせよ、年間5-6ヶ月間、コンクール関連の話題が特集化されかつ同じ内容が、毎年、同じ号に掲載されるということこそ、同誌がコンクールのための雑誌となっていることの証左である。

tab.5 Band Journal 特集記事分類：月別

特集分類		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1 コンクール報告	1959-1980						2		2	5	17	2		28
	1980-1999								19	19	19			57
2 課題曲関連	1959-1980			2	3	4	1					3		13
	1980-1999		17	6	1							19	1	44
3 コンクール対策	1959-1980													0
	1980-1999	2	1		3	1	1						2	10
4 その他コンクール報告	1959-1980	1	1				1							3
	1980-1999		1	15				1						17
5 楽器関連	1959-1980	2		5	1			2		2		4	1	17
	1980-1999	7	1	1	8	7	8	7					7	46
6 楽曲・楽譜理解	1959-1980			2	2		1	1					2	8
	1980-1999	1			2	1		1						5
7 奏法・練習法	1959-1980			2	4	6	2	2	1	2		1	1	21
	1980-1999	2		1	4	5	6	2					2	22
8 運営・指導法	1959-1980	9	8	3	1	2		2	4	1		1		31
	1980-1999	2				1	4						3	10
9 演奏会演出	1959-1980								1				5	6
	1980-1999				1			2						3
10 作曲家・演奏家	1959-1980		1	2	2		2	1	1	2	2	2	1	16
	1980-1999	3		2	1	3	2	4					2	17
11 その他	1959-1980	6	7	2	4	3	5	10	9	7	2	4	6	65
	1980-1999	2	1	1	1	2	1	1				1	4	14
12 特集なし	1959-1980	3	4	2	4	5	6	3	3	4	2	4	8	48
	1980-1999													0
月別 特集数 合計	1959-1980	21	21	20	21	20	20	21	21	23	23	21	24	256
	1980-1999	19	21	26	21	20	22	18	19	19	19	20	21	245

* 対象冊数は246冊。1959年10月号から1980年3月号まで。

** 集計対象が1980年3月までなのは、大倉論文(2017)との関係による。

ふたつの期間で特集数の差が大きいものとしては、他に「楽器関連」の記事がある。そうして、この特集の分布をみると、学年末と学年始めおよび夏休みから秋にかけて集中していることがわかる。7月から10月にかけては「吹奏楽コンクール」の地区予選が開始される時期である。しかし、すべての学校・吹奏楽部・部員が大会に出場する訳ではない。また、「コンクール報告」のように毎年必ず特集されているわけでもない。よって、これは生徒・学生にとってゆっくりと楽器に向かい合える時期に対応させた特集であるといつてよい。

こうした学校暦に対応した特集として、「運営・指導法」を挙げることができる。1980年代以降は特集化されなくなっているが、これが新入生・新入部員対策に対応

した企画であることは、4月・5月号に集中して記事化されていることから明らかである。

結果と考察 03 地区大会参加校数の推移

本稿の主たる目的である、「バンド・ジャーナル」誌における「コンクール関連特集」の定着化時期の確定については、それが1978年前後であることが判明した。また、その理由についてもいくつかの手がかりが得られた。だが、以下にもうひとつ別のデータを確認することによって、補足的な考察をおこないたい。

「はじめに」で述べたとおり、わが国の吹奏学界はいわゆる「スクール・バンド」が支えているといって過言ではない。高校野球＝甲子園になぞらえた「めざせ普門館」ということばも、スクール・バンドならではといってよい。2)

ところで、tab.4にもとづく考察で記したように、「バンド・ジャーナル」誌の編集方針の変更の背景には、ふたつの側面の存在が示唆された。ひとつは吹奏楽愛好者層の拡大という量的な要因であり、もうひとつは、それにとまなう各種コンテストの開催という吹奏楽関連のイベント性の拡大である。

このうち前者については、「吹奏楽コンクール」の参加校数とその推移が手がかりとなろう。ただし、この件に関するデータを全日本吹奏楽連盟は公開していない。また、全国の各支部もそうしたデータは作成していないようである。

そこで、吹奏楽関連のデータベースである Musica Bella を利用し、各支部大会での中学および高校の参加校数とその推移をデータ化の上、若干の考察をおこなう。3)

tab.6 吹奏楽コンクール支部大会参加校数推移 1960-2010

		1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010
北海道	中学	9	11	9	9	16	19	19	20	22	21	21
	高校	9	10	9	10	15	17	17	15	16	18	18
東北	中学	7	17	22	24	31	42	49	48	88	96	105
	高校	4	11	20	23	20	36	58	52	102	120	162
関東	中学	18	49	45	51	52	41	39	43	108	210	208
	高校	24	28	20	39	35	24	28	42	68	83	106
中部	中学	13	18	13	25	69	51	64	53	106	116	116
	高校	7	21	15	26	52	44	49	48	67	99	114
近畿	中学	5	11	26	13	22	35	117	103	150	195	202
	高校	5	25	41	21	23	27	90	77	108	120	122
中国	中学	10	27	31	54	65	103	114	88	66	121	194
	高校	20	38	49	61	75	90	71	50	41	76	127
四国	中学	7	4	4	1	7	8	8	8	16	16	62
	高校	1	4	4	1	7	8	8	9	11	12	36
九州	中学	8	29	19	29	46	56	47	97	96	193	135
	高校	9	26	14	31	49	65	63	70	99	161	142
合計	中学	77	166	169	206	308	355	457	460	652	968	1043
	高校	79	163	172	212	276	311	384	363	512	689	827

* 本表は支部大会参加校のデータである。すなわち、地区大会参加校数よりやや少なくなっている。

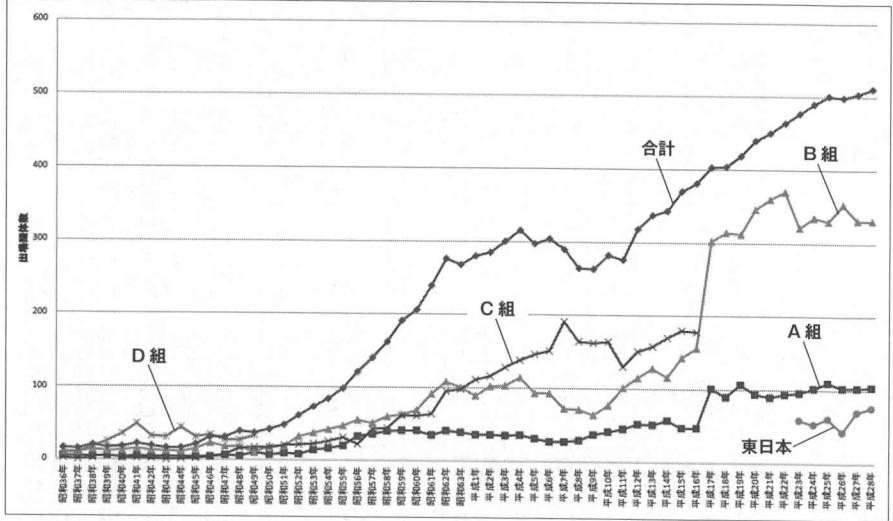
tab.6 からは、1960 年からの 50 年間で支部大会参加校数が 10 倍になっていることがわかる。加えて、ほぼ一定の割合で参加校数が増えていることがわかる。そうした中、もっとも目立つのは 2000 年から 2005 年にかけての増え方である。次いで、1995 年から 2000 年、さらに 1985 年から 1990 年および 1975 年から 1980 年での増え方が目立っている。

1975 年からの増加については、上述の「愛好者層の拡大・関連各種コンテストの増加」と時期的に合致する。また、1985 年からの増加は競合誌の創刊・定着がなされた頃であり、やはり一定の愛好者拡大があった時期と解される。

しかしながら、もっとも増加率の高い 2000 年からの変化および 1995 年からの変化については、解釈の手がかりが得られなかった。前出の秋山の年表からも、当該年度前後にそれらしい記述を見いだすことはできない。

そこで補助的な資料として、東京都中学校吹奏楽連盟が作成したデータを確認してみる。表中の「A 組・B 組・C 組」などは全日本吹奏楽連盟が規定する参加形態の区分である。この中で、いわゆる「全国大会」をめざすのが A 組であり、B 組以下は下位の大会をめざすものか上位大会のない参加となっている。

fig.1 東京都中学校吹奏楽連盟加盟校における大会出場校の推移 (1961-2016)



* 東京都中学校吹奏楽連盟による図を一部改編

fig.1 からわかるとおり、2005/平成17年に大きなピークがあり、tab.6での200年から2005年の増加率に合致する。しかし、それ以外の部分では、少なくともA組出場校の実勢に関する限り、着目すべき変化を見いだすことはできなかった。

しかし、「全国大会」をめざす部分のみが話題となることの多いスクール・バンドにおいて、「A組」以外の吹奏楽部・吹奏楽部員の活動にあらためて注目する必要がある。言い換えれば、今日の吹奏学界を支えている層への全体的な着目であり、そうした層とメディアとの関係性の再検討である。

まとめ

本研究は、大倉の「日本の吹奏楽専門誌の内容分析」(大倉 2017)の統制性を持つものである。すなわち、「バンド・ジャーナル」誌における「全日本吹奏楽コンクール」に関連する情報提供の強化の開始時期とその理由について若干の考察をおこなうことを目的としている。同時に、そこから今後の研究のための新たな課題の探索と手がかりを得るためのものでもある。

その結果、同誌が「コンクール関連」の情報提供に主眼を置きはじめたのは1978/昭和53年頃からであることが明らかとなった。この編集方針の変化の背景には吹奏楽人口の増加があることが示唆されたが、それ以外の要因に関しては手がかりを得ることができなかった。

また、全国大会をめざす吹奏楽部自体が増加しているものの、その背後には、規模的な問題などから全国大会をめざさない吹奏楽部・部員が多数存在する。今日の吹奏楽の隆盛を理解する上でも、そうした層と全国大会に着目しがちなメディアとの関係性に関する解明が今後の課題となった。

注

- 1) 1980年に創刊された「バンド・ピープル」誌では、「巻頭言」は設けられていない。
- 2) 普門館は耐震強度不足などの理由から使用できなくなった。また、その所有団体が改修を断念したために、2011年の大会を最後に、全国大会会場ではなくなった。
- 3) 「全日本吹奏楽コンクール」への出場には各種の規程・制限などがあり、また、それらがしばしば変更されるために、正確な参加校数を算出することは困難である。今回は、全国大会への出場をめざす「A組」のみをカウントした。また、支部大会参加校をカウントした（支部大会の下に地区大会が設定されているケースもある）。よって、今回のデータに出ている学校数は、全日本吹奏楽連盟の各支部に所属している学校数より少なくなっている。

References

- 秋山紀夫 2013「吹奏楽活動の歴史（年表）」『吹奏楽の歴史』ミュージックエイト
- 大倉恭輔 2016「日本の吹奏楽におけるポピュラー音楽の導入 - Band Journal 誌の内容分析から -」実践女子大学短期大学部紀要 vol.38
- 2017「日本の吹奏楽専門誌における特集記事の内容分析 - 1980年-1990年の「バンド・ジャーナル」と「バンド・ピープル」を対象に -」実践女子大学短期大学部紀要 vol.39
- 文部科学省 2014 学校教育総括 文部科学統計要覧（平成26年度）
- http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1349641.htm（最終閲覧：2018年2月20日）

Musica Bella 吹奏楽コンクール結果一覧

<http://www.musicabella.jp/concours/>（最終閲覧：2018年2月20日）

東京都中学校吹奏楽連盟 56年間の吹奏楽コンクール出場団体数推移

http://www.tokyo-chusuiaren.org/1st_section/syutujou_suii.pdf（最終閲覧：2018年2月20日）

全日本吹奏楽連盟 2014「総務報告」すいそうがく No.196